

発信 地域から



室蘭

昨年12月、室蘭市の北斗文化学園・北海道福祉教育専門学校の新設される4月に同校に新設される「メデイカル療育コース」への進学を決めた日本語教育課程(6カ月)のミヤンマー人留学生9人が、教員と将来の夢を語り合っていた。

ピエ・ピョー・トゥさん(20)は「現地に障害児などを受け入れる保育施設を造りたい」。ワー・ワー・ポワさん(22)は「地元には病院がなく、母を40代で亡くした。学校を出て医療に携わる仕事に就いて、いつか故郷に戻って病院を建てたい」と語った。

海を越える介護人材

北斗文化学園の挑戦

医療ケア学ぶ

9人が進むのは、日常的にたんの吸引などが必要な医療的ケア児に対応できる保育士を育てる国内初のコースだ。現在の制度では保育士の資格を



取得しても、保育士として日本で働くことはできないが、保育に加えてたんの吸引など医療的ケアの知識を習得できることから同コースを選んだ。医療機関では、入院患者の高齢化と慢性的な人手不足で看護師の負担が重くな

① 日本で働き 母国で夢を

採用予定で、新コースの卒業生の採用も視野に入られる。同病院の村下十志文理事長(67)は「即戦力として期待しており、今後も学校との連携を図りたい」と話す。

広がる就労先

日本で保育士としての就労が可能になる動きも出ている。保育士不足や、在留外国人増加に伴い乳幼児数も増えていることから、愛知県は24年、外国人保育士の就労要件を緩和する国家戦略特区の認定を受けた。

また、医療的ケア児が全国約2万人、道内約700人とされる中、21年に医療的ケア児支援法が施行され、26年度には受け入れ保育所などへの補助金が増算される見通しで、医療的ケアができる

人材の需要が高まる可能性がある。同校の沢田乃基校長(55)は「卒業生の就労先は今後、医療的ケア児を受け入れる保育園や福祉施設など幅広く広がるだろう」と語る。

新コースに限らず、ミヤンマー人留学生が増えている背景には、21年の軍事クーデター以降の政情不安で、安全な日本で学びたいという志向が強まったことが大きい。デモに参加した友人たちが殺されたり、拘束されたりするのを目の当たりにした「母国では大学に通えず働き口も見つからない。夢を諦めたくなくて日本に来た」と切実だ。沢田校長は願う。「日本の医療や保育の現場で経験を積み、将来は母国で夢をかなえてほしい」

(室蘭報道部 村上真緒)